

山口県埋蔵文化財調査報告書第129集

よみがえる仁保の歴史 1

土井遺跡

県営圃場整備事業に伴う山口市土井遺跡発掘調査概報



序

山口県では、豊かな地域社会の実施に向けて農業基盤整備事業等の諸施策を実施しています。

私たちの県土山口を築いてきた先人のその永い営みを今に伝える数多くの歴史的遺産を、こうした開発との調整を図りつつ記録にとどめて後世に残すため、財団法人山口県教育財団では教育・文化の振興という立場から、本年度も山口県農林部の委託を受け、圃場整備地区に係わる埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

ここに報告いたしました山口市仁保土井河内所在の土井遺跡の調査では、弥生の集落・中世武士の居館・近世の生活遺構が発掘され、多くの貴重な資料を得ることができました。

これらの資料は、当時の人々の生活を知る上で、貴重な手掛かりを与えてくれました。

この発掘調査の成果をまとめた本書が、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを期待するものであります。

調査に当たりまして、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成2年2月28日

財団法人山口県教育財団
理事長 高山 治

序

本県では、恵まれた自然環境のなかで豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進しています。

こうした開発工事からかけがえのない埋蔵文化財を保護し、併せて、開発と文化財保護との調和のとれた県土づくりを目指して、山口県教育委員会では関係機関と協議を行い、遺跡の保存や発掘調査を実施しているところです。

平成元年度は、山口市仁保土井河内にある土井遺跡で発掘調査を実施しました。本遺跡では、仁保盆地で初めて発見された弥生の住居跡や中世に在郷武士であった仁保氏の館跡などが発掘され、郷土の先人たちの生活や文化を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本書は、その調査成果をまとめた記録であり、文化財愛護への理解を深め、教育並びに学術研究の資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成2年2月28日

山口教育委員会
教育長 高山 治

例 言

- 1 この報告書は、財団法人山口県教育財団と山口県教育委員会が平成元年度に実施した県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、山口市大字仁保^{にほ}下部にある土井遺跡の調査概要をまとめたものです。
- 2 この報告書は、発掘調査の概要を多くの方に理解していただけるよう、写真や挿図を中心として編集を行いました。
- 3 この報告書に使用した遺跡位置図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図（仁保）を複製したものです。
- 4 この報告書に使用した土色や土器の色調の表記はMunsell方式によりました。農林省農林水産技術会議事務局（監修）「新版標準土色帖」
- 5 出土品の整理に当たっては、山口県埋蔵文化財センター整理室の協力を得ました。
- 6 この報告書に使用した図面及び資料の作成・写真撮影は主に松島が行い、渡辺が補佐しました。
- 7 本書の編集・執筆は、松島・福坂・渡辺が担当しました。
- 8 表紙に使用した館想定図は宇野由希子・品川直江が作成し、また、挿図イラストは品川が作成しました。

土井遺跡

—県営園場整備事業に伴う山口市土井遺跡発掘調査概報—

目次



遺跡のあらまし

| | |
|-----------------|---|
| 遺跡はどんな場所にあるのか | 1 |
| 仁保の歴史をふりかえってみよう | 3 |
| 調査はなぜ行われたのか | 5 |
| 調査はどのように進められたのか | 6 |

姿を現した遺跡

| | |
|------------|----|
| 発見された遺跡 | 8 |
| 弥生時代の遺構と遺物 | 11 |
| 中世の遺構と遺物 | 15 |
| 近世の遺構と遺物 | 29 |

まとめ

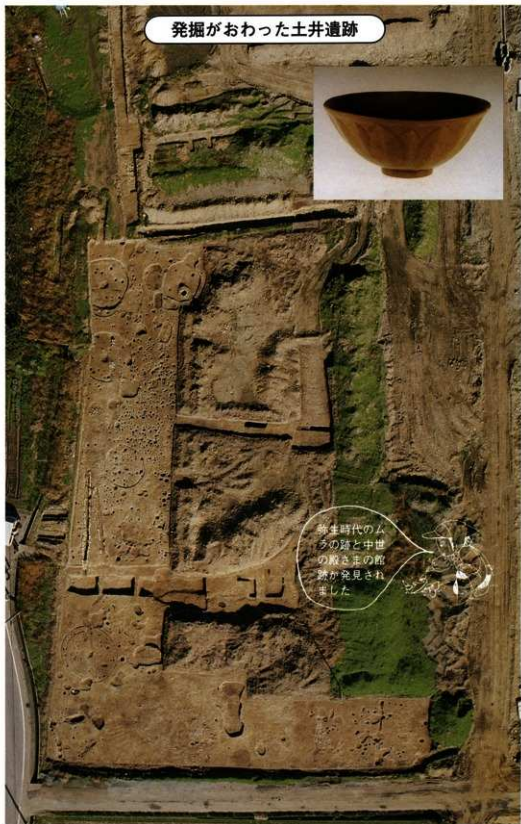
| | |
|-------------------|----|
| 明らかにされた弥生のムラ | 31 |
| 明らかにされた平子氏(仁保氏)館跡 | 31 |

発掘がおわった土井遺跡



弥生時代のム
ラの跡と中世
の殿さまの館
跡が発見され
ました。

土井



遺跡のあらまし

遺跡はどんな場所にあるのか

遺跡は、山口市大字仁保下郷字下中屋、通称土井河内にある。仁保は、山口県のほぼ中央に位置し、山口市の北東部を流れる仁保川沿いに開けた谷底平野である。小郡から山口線をたどれば宮野駅の次が仁保駅である。仁保は三方を山に囲まれてはいるが、古来交通の要衝であった。現在も東西に走る国道376号線をはじめとして、道路網が発達している。

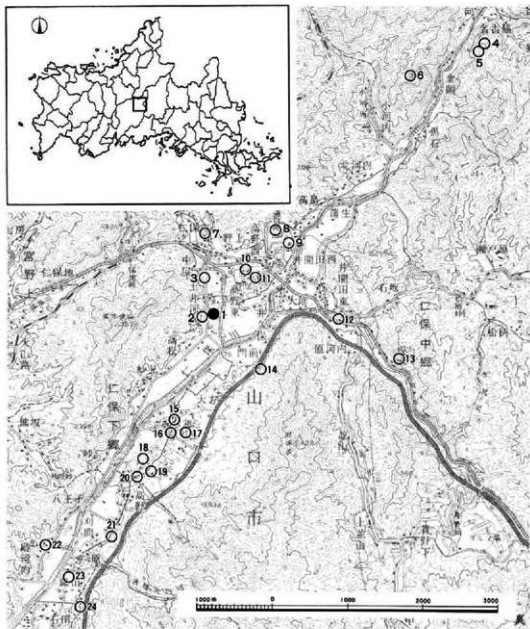
遺跡のある土井河内は、盆地の北西縁辺部、仁保川支流の浅地川と宮野丘陵に挟まれた地区にある。この遺跡に立って周囲を眺めると、東には眼下に浅地川が南流して仁保川に合流している。浅地川の対岸の高野台地上には、巨大なパラボラアンテナと山口県警察学校の建物が目に鮮やかである。その後方には、物見ヶ岳・高羽ヶ岳などの700m級の高峰が連なっている。目を東から南へ転じると、幅1kmくらいの谷あいには、肥沃な水田や果樹園が広がり、のどかな農村風景を展開している。遺跡の背後には、南北に長く宮野丘陵が延び、その最高峰である東方便山の支脈である正法寺山が、目前まで迫っている。土井河内の集落は、その山麓の傾斜変換線に展開している。

遺跡は、浅地川の右岸段丘上にある。盆地内は大別して三段の段丘があるが、この段丘はその下位にあたる。その地層を見ると、耕土・盤土の下には明黄褐色砂質粘土層があり、さらにその下には砂礫層が深く続いている。山口市立大内中学校教諭松尾征二氏の研究によれば、この明黄褐色砂質粘土には、鬼界ヶ島の火山から運ばれたアカホヤ火山灰が含まれているという。地層形成過程は、まず洪積台地が水河に浸蝕され深い仁保谷ができ、そこに砂礫が堆積した(古期沖積層)後、今から約6300年前に降り積もったアカホヤ火山灰が、他の土砂とともにながされて、古期沖積砂礫上に再堆積した。遺構は、この明黄褐色砂質粘土層に掘り込まれている。



▲土井遺跡周辺の地形

①国道376号線 ②高野台地 ③瀬ノ内地区 ④蔵本地区 ⑤調査区 ⑥仁保川 ⑦浅地川 ⑧宮野丘陵



- | | | |
|-----------------|------------------|----------------------|
| 1 土井遺跡 (弥・中近世) | 9 聖相遺跡 (弥) | 17 片山々原遺跡 (縄) |
| 2 平子氏館推定地Ⅰ (中世) | 10 台山遺跡 (弥・古墳) | 18 小高野第Ⅲ遺跡 (弥・古代・中世) |
| 3 平子氏館推定地Ⅱ (中世) | 11 高野台遺跡 (古墳) | 19 小高野第Ⅱ遺跡 (縄・弥) |
| 4 白水城跡 (中世) | 12 原河内遺跡 (古墳) | 20 小高野第Ⅰ遺跡 (縄・弥・古墳) |
| 5 白水銅山跡 (近世) | 13 坂本経塚 (古代) | 21 東園遺跡・石棺 (縄・弥) |
| 6 すいし城跡 (中世) | 14 瑠璃光寺遺跡 (中世) | 22 深野氏館推定地 (中世) |
| 7 船山経塚 (古代) | 15 丸山遺跡 (縄・弥) | 23 上南原遺跡 (縄) |
| 8 楢松遺跡 (弥) | 16 仁保岡の原遺跡 (縄・弥) | 24 釜山遺跡 (古墳) |

土井遺跡の位置と周辺遺跡の分布

仁保の歴史をふりかえってみよう

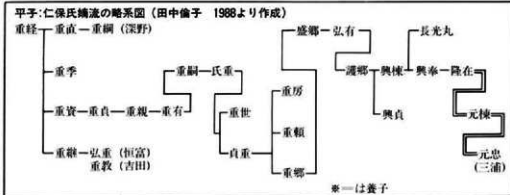
山口県の東部地方には、断層が北東—南西方向に発達しており、主な河川はこの断層線にそって流れている。佐波川や樫野川、阿武川はともに大規模な断層に沿った主要な河川で、古くから山陽と山陰をつなぐ重要な交通路であった。仁保川はこの樫野川の支流であって、佐波川水系への交通路でもあった。このような地理的な環境から、仁保谷には古くから人々の生活が展開した。昭和61年度に発掘調査が行われた瑠璃光寺跡からは約7-8000年前の縄文時代早期のものと思われる石獣が発見されている。仁保では縄文時代から永々とした人々の生活が展開されたのである。

この遺跡が登場する弥生時代と中世の様子を簡単に見ておこう。

「山口市遺跡地図」によると、仁保地区には約20ヶ所の周知の遺跡があるが、大部分は未調査でありその実態はわかっていない。弥生時代もまたしかりであり、唯一丸山遺跡の一部が昭和58年度に発掘され、弥生時代中期後半の墓地跡が明らかとなっている。今出土井遺跡で検出された集落は、ほぼ同時代に形成され後期末まで営まれている。両遺跡は地理的にはかなり離れており、丸山遺跡に墓地を造った人々と土井遺跡の集落に住んだ人々は別の集団である可能性が高い。弥生時代中期後半の仁保には少なくとも二つの集団が存在していた。

中世の仁保の歴史は、法勝寺領仁保庄に地頭として派遣された平子氏を中心^{平子}に展開したといっても過言ではない。平子氏は鎌倉幕府の重臣三浦氏の一族で、建久8年(1197)に仁保平子氏初代の重経が仁保庄及び恒富保の地頭に補任され入部している。後に仁保氏を称し、大内氏の重臣となるが、最後は毛利氏に従い萩藩士となり三浦姓を名のった。この三浦家に残った三浦家文書は山口県を代表する中世文書として著名であるが、この文書により、数百年にわたる平子氏の動向を知ることができ、仁保の中世の様子をかいま見ることができる。

古代末頃の仁保には仁保庄があり、坂本経塚で代表される仏教文化が開花していた。おそらく相当の家族が支配していたと見られ、また、近接する大内地区は周防国の在庁官人として強大な勢力を持つ大内氏の本拠地であり、こうした在地勢力の中に初代重経は入部したのである。二代重資の代になると仁保五箇郷の地頭公文兩職を得、分家の恒富・吉田両家と深野氏とあわ



せると平子氏は一段と権限・領地を拡大していったと思われる。

南北朝の動乱期の六代重嗣は北朝方につき各地を転戦したが、領内でも浅地川から仁保川右岸を開発し、源久寺参道にあった八幡宮を船山に移している。船山は山口市宮野からの交通路が仁保に入ってくる地点にあり、また、平子氏の本拠地土井をへて深野へ向かう主要道の起点でもある。平子氏はしだいに荘園領主支配を排除し、一元的な庄支配を確立させていった。

仁保氏は重嗣以後しだいに大内氏への臣従を強め、大内氏の勢力伸長と伴に所領を拡大していった。文明2年(1470)年前後には、その所領は仁保以外に長門国茶臼郷、周防国楊井本庄、筑前国麦野清水村、同国分寺領、豊前国吉田庄などに拡大している。

天文20年(1551)年、大内義隆が重臣陶晴賢の反乱により敗死すると、平子氏は一時陶氏の擁立した義隆に従うが、やがて毛利氏に降っている。この頃、平子氏本家は吉田分家の二男隆在が継いでおり、隆在の後は吉川元春の二男元棟、ついで神田元忠が継ぎ、重経以来の血筋は途絶えた。元忠は姓を三浦と改め、山口に居をかまえるが、こうして、仁保と平子氏の地縁的結びつきはとだえ、おそくとも16世紀後半には平子氏は完全に仁保から退去したのである。こうして、平子氏とともに歩んだ仁保の中世は終わりを告げた。



伝重経墓(源久寺宝篋印塚)

源久寺参道にあり開基平子重経墓と伝えられる源久寺は重経が源朝の菩提を弔うため建立した寺。



船山八幡宮

鎮岡八幡宮から勧請、重嗣が現在地に移す鳥居前には市が形成され、仁保の流通拠点となる。



深野氏館跡

字殿河内といい、庶家深野氏の館推定地。深野は仁保谷の出口で、宮野志路から長谷峠を越えて仁保谷に入る入口でもある。



琉璃光寺跡

昭和61年に発掘。179基からなる墓地跡が発見され、平子(仁保)氏家臣団の墓地と推定されている。

調査はなぜ行われたのか

土井遺跡は弥生時代の集落跡と中世の館跡からなる複合遺跡である。仁保地区では従来数例の発掘調査しか行われておらず、遠い昔から仁保谷で営々と繰り返された人々の歴史を明らかにする上で貴重な遺跡の発見であった。

山口県では、各地で圃場整備事業を推進している。この事業は、大小様々な田圃の区画を一定の面積に造り替え、周囲に用排水溝や作業道を整備することにより、農作業の機械化を進め農業の経営規模を拡大して生産性を高めることを目標としている。日本で米作りが始まった弥生時代以来、二千数百年間、人々は荒地を開墾して田圃を築き、この耕地を整備しながら農業の営みを続けてきたのである。圃場整備はこうして繰り返された営みのひとつである。

しかし、これまでの耕地整備がすべて人力で行われたのに対し、圃場整備事業は機械力を使った大規模な土木工事である。そのため、これまで保全されてきた景観や埋蔵文化財などの歴史的文化的遺産が大きく損なわれることになった。そこで、山口県教育委員会では、圃場整備事業地区内の埋蔵文化財を保護するため、あらかじめ遺跡の分布調査を行い、周知された遺跡については現状保存を前提に山口県農林部耕地課と協議を行っている。そして、このうち現状保存が困難な遺跡については、事前に発掘調査を行い詳細な記録を作成することとしている。

仁保における圃場整備事業は、246haを対象に昭和59年度から実施されており、仁保上郷から順次事業が完了してきている。土井地区については、昭和62年度に分布調査を実施し、建物の柱穴などの遺構を検出したが、この一帯は従来から平子氏館跡の推定地とされており、遺跡の保存などについて耕地課と協議してきた。しかし、圃場整備事業が平成元年度に施工されることになったため、工事で掘削される部分を中心に、事前の発掘調査を実施することにした。

調査は、対象面積を約2,000㎡と予想し、調査に要する経費については、農林省と文化庁の覚書により、その72.5%を農林側が、27.5%を文化財保護側が負担することにした。調査は、農林負担分を財団法人山口県教育財団が受託し、文化財保護負担分については県教育委員会が直営で実施することにした。



調査前の遺跡景観



着々と進む圃場整備工事

調査はどのように進められたのか

土井地区では、昭和62年度に行った分布調査ですでに建物の柱穴などが確認されていたが、この一帯が平子氏館跡の推定地とされていたため、堀ノ内地区から下中屋地区にかけさらに詳細な分布調査を行い調査区をしぼることにした。

再度の分布調査は平成元年8月に行い、試掘トレンチは計32本にのぼった。

堀ノ内地区は浅地川の氾濫などで砂礫層が全面を覆っており、遺構が部分的に確認されるものの、大半は破壊されていることがわかった。

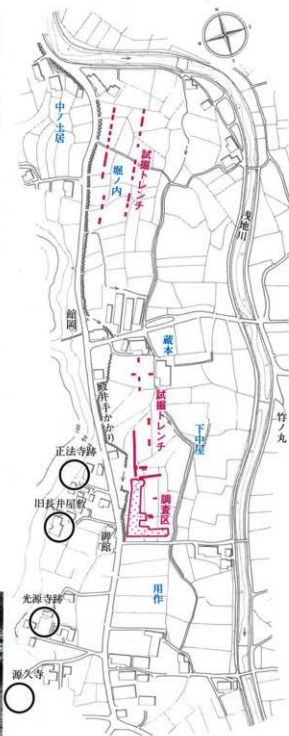
蔵本地区は、西の小谷から押し出した土石流による砂礫の堆積のみで、遺構・遺物はなかった。

下中屋では、その南西部に遺構が集中していることがわかった。そこは、御館・旧長井屋敷・正法寺跡に隣接した場所でもあり、今回の調査はこの地区にしぼって実施することにした。

発掘調査は、9月4日から始めた。器材搬入などの諸準備をし、9月11日から重機を利用して表土除去を行ったが、ここでも



堀ノ内地区のトレンチで検出した柱穴



0 200m

調査区の位置

予想を超える範囲が砂礫で覆われていたため、調査区は山際によせて南北に細長く設定した。

9月26日までに遺構検出を終え、引き続きその掘り込みを行った。これは遺構を覆っている黒味がかった埋土を除去して当時の姿を再現させる作業で、土層観察用に畦を残し用心深く掘り下げていった。途中、土器などの遺物が出土すると、その状況を精密に図化し写真撮影を行った。

こうして遺跡の全容が明らかになったのは、11月中旬であった。図面や写真などの資料をとり終え、12月2日の現地説明会をもって発掘調査は完了した。

12月から翌年2月まで、山口県埋蔵文化財センターにおいて、遺物の整理や概要報告書の作成を行った。

なお、調査に当たっては、山口県山口土地改良事務所・山口市仁保土地改良区・山口市教育委員会・山口建設KK・地元関係者のご協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

調査組織

- 調査主体 財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会
- 事務局 財団法人山口県教育財団
山口県教育委員会文化課
山口県埋蔵文化財センター
- 調査総括 山口県埋蔵文化財センター
次長 中村徹也・係長 藤井勝彦
- 調査担当 指導主事 松島幸夫・福坂通恭
文化財専門員 渡辺一雄・西岡義貴
- 調査援助 山口県埋蔵文化財センター職員



▲表土削ぎ

地下に眠る遺跡に思いをはせ、永い時のペールを削します



▲遺構の掘り込み

黒味がかった土を取り除くと当時の姿がよみがえります



▲遺構や遺物の実測

精密な実測を行い、記録として永久に保存します



▲現地説明会

発掘調査の成果を郷土の皆様に見ていただきました

姿を現した遺跡

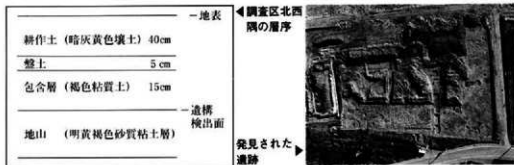
発見された遺跡

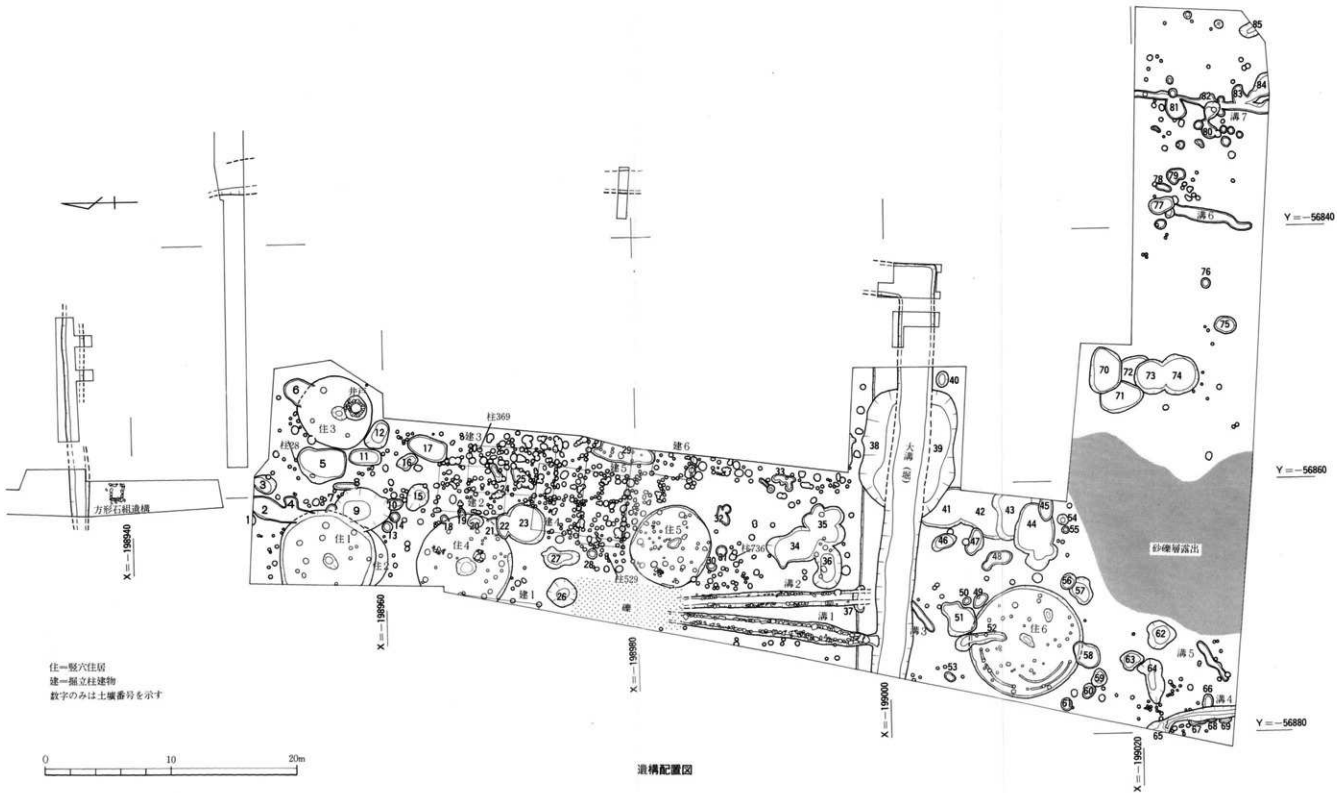
土井遺跡では、弥生時代中期から後期末にかけての集落跡と、中世の館跡の一部が発見された。検出された遺構は、堅穴住居6軒、土壇85基、溝8条、井戸1基、掘立柱建物6棟、柱穴多数などである。溝のうち調査区の中央部をほぼ東西に走る1条は、西側で北に向かってL字形に曲がっており、幅も3mを測ることから、館を囲郭する堀の可能性が高い。検出された遺構は、調査区のほぼ全域に分布するが、とくに堀で囲まれる部分に集中している。

調査区は浅地川の氾濫源から北高約2mばかりの段丘上にあり、この段丘は山寄りに洪積粘土層の分布が見られるものの大部分は砂礫層（古期沖積層）で形成されている。調査区内でも、東辺部に洪積粘土層が一部のぞいており、弥生時代の堅穴住居は大部分がこの層に掘り込まれている。調査区のほとんどは砂礫層であり、この上にアカホヤ火山灰の2次堆積層とみられる明黄褐色砂質粘土層が薄く堆積しており、その上面が遺構面となっている。

遺跡の基本的な層序は調査区の北半部と南半部で異なっており、南半部では耕作土の直下で遺構が検出されるのに対し、北半部では上から耕作土、盤土、包含層、遺構面の順に堆積がある。包含層は上面が焼けており土師器片を含んでいる。本来この上面に遺構面があったとみられるが、この層はその後の水田耕作の影響で攪乱がひどく遺構検出は困難であった。そこで、実際の遺構検出はこの層を取り払った面で行ったが、この面で新たに検出された遺構もあり、包含層はある時期の整地層であった可能性もある。総じて遺構は残りが悪く、遺跡は長い間の水田耕作により徐々に削平されたと思われる。

弥生時代の堅穴住居には中世の遺構が重複している。また、中世の遺構も重複しているものが大半であり、中世の遺跡は相当期間存続していた可能性が高い。調査では、この重複した遺構の切り合いを明確に把握するため、土層観察用の畦を残し慎重に発掘したが、前述したとおり攪乱状態がひどく地山のところどころに砂礫がのぞいているため、切り合いの把握は必ずしもすべてについてできていない。





住一 竪穴住居
 建一 孤立柱建物
 数字のみは土壌番号を示す

遺構配置図

弥生時代の遺構と遺物

遺構

弥生時代の遺構としては、6軒の竪穴住居・3基の土壇と一条の溝を検出した。

竪穴住居とは、地面を浅く垂直に掘り下げて床をつくり、これに柱を立て、カヤなどで屋根を葺いた家である。縄文時代から古代に至るまで、人々が生活を営んだ最も一般的な形の住居であった。竪穴住居の中央には炉が掘ってあり、それを囲んで作業・食事・団楽をしたのであつたのであろう。以下、掘り出された竪穴住居の紹介をする。

1号竪穴住居：調査区の北西端に位置する。西は調査区境で切られており、住居の一部は調査区外へ延びている。南は2号竪穴住居と重複している。



▲1・2号竪穴住居



▲3号竪穴住居



▲4号竪穴住居

平面形はほぼ円形をなし、直径約770cmである。床面までの深さは約30cmである。主柱穴は、推定7個が壁面に沿って、220～250cmのほぼ等間隔に配列されている。さらにその内側には、300×220cmの方形に4個の支柱穴が配されている。中央には、炭混じりの黒褐色土で埋まった炉とみられる穴があり、平面形は長軸140cm・短軸92cmの長円形で、断面は深さ32cmのすり鉢状をしている。周囲には、幅20cm前後・深さ8cmの周溝が巡っている。貼り床はなく、床面には礫が露出していた。

2号竪穴住居：前述した1号竪穴住居と重複している。その切り合い関係は明確でないが、1号が2号を切っている可能性が高い。

南の一部しか残っていないが、その壁面から推測すると、円形プランで、直径は600cm程度であろう。深さは8cmである。周溝はない。

3号竪穴住居：調査区北東端にある。北東の隅を中世の土壇によって切られ、住居内には重複して中世の井戸が掘り込まれている。

平面形はほぼ円形をなし、長軸605cm、短軸540cmで、この遺跡では最小規模の竪穴住居である。床面までの深さは25cmである。主柱穴は、井戸の掘り込みによって1個が確認できないものの、中央穴を囲んで300×200cmの方形に4個配置されている。

中央穴は、長軸125cm・短軸105cmの長円形の平面をなし、深さ25cmである。周溝はなく、床には砂質粘土が貼られていた。

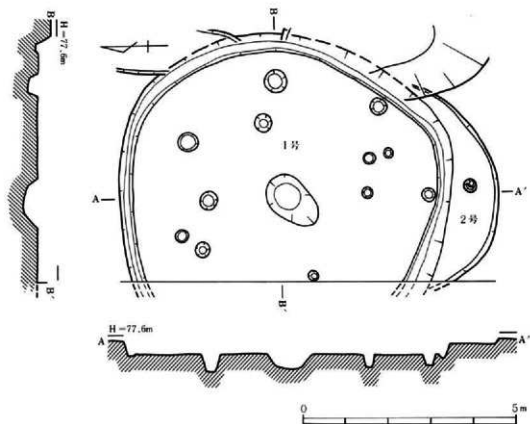
4号竪穴住居：調査区の北西側1号竪穴住居の南にあり、西は調査区境で切られている。重複して中世の根石状集石遺構があり、東から北にかけては中世の土壌による攪乱が著しい。

平面形はほぼ円形をなし、直径約750cmで、深さは15cmである。支柱穴は、推定8個が壁面に沿って、225～270cmの間隔で配列されている。支柱穴は2個で、中央穴を挟み355cmの間隔で配されている。中央穴は、直径約150cmでほぼ円形をなし、深さは28cmである。周溝は、幅15～32cm・深さ9cmで、南縁に沿って掘られている。東から北にかけては攪乱がひどく、検出できなかった。

5号竪穴住居：調査区のはほぼ中央に位置する。中世の攪乱が全面に及んでいる。

円形プランをなし、長軸645cm・短軸610cmを測り、深さは25cmである。支柱穴は、200～280cmの間隔で7個が配列されている。支柱穴は、一辺280cmの方形に4個が配されている。中央穴は長軸125cm・短軸70cmの長円形で、深さは10cmと比較的浅い。周溝は、幅約15cm・最大深13cmで巡っているが、西縁では礫の露出により検出できなかった。

6号竪穴住居：調査区やや南側に位置する。削平がひどく、周溝を残すのみである。その内



1・2号竪穴住居実測図

側にはさらに2条の周溝が部分的に残っているが、これはこの住居が建て替えを行い、拡張されていったことを示すものであろう。

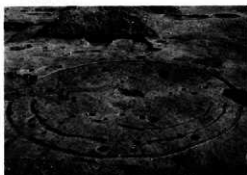
円形プランをなし、長軸910cm・短軸865cmで、この遺跡では最大規模の竪穴住居である。主柱穴は、270～320cmの間隔で8個が配列されている。中央穴は長軸142cm・短軸68cmの不整な長円形で、深さは18cmである。なおその東南東に、長軸108cm・短軸60cmの長円で深さ12cmの屋内土壇がある。周溝は、幅約20cm・深さ約5cmで円周をなす。

そのすぐ内側にある周溝は、6号竪穴住居とはほぼ同心円をなし、直径は600cm程度であろう。

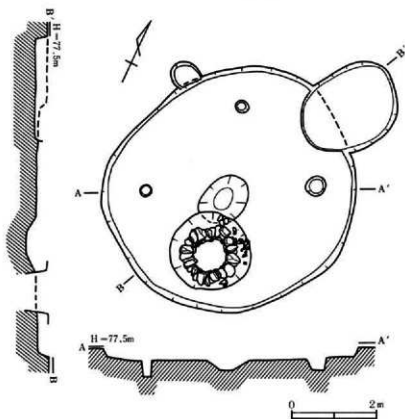
最も内側にある周溝は、6号竪穴住居とは中心がずれており、規模の復元は困難である。



▲5号竪穴住居



▲6号竪穴住居



3号竪穴住居実測図

遺物

出土した遺物はわずかであり、大半は細片であるため、図化できたのは次の8点である。

壺形土器：1は第4号住居跡埋土中出土。口縁端部は大きく下垂し、外面には連続する山形文がヘラ描きされ、内面にはX字状文のヘラ描きと4条からなる櫛描き文がある。橙色(2.5YR7/8)で、胎土は粗く砂粒を多く含む。2は第1号住居跡床面出土。口縁端部がやや内傾ぎみに立ち上がる複合口縁である。口縁外面は連続する山形文が細くヘラ描きされており、山形文と口辺の間はさらに細線で埋めている。浅黄橙色(10YR8/4)で、胎土は砂粒を多く含む。3は第1号住居跡出土の口縁片。口縁端部がやや開きぎみに立ち上がる複合口縁である。浅黄橙色(10YR8/4)で、胎土精良、細砂を多く含む。

甕形土器：4は第3号住居跡出土。口縁はやや外反ぎみに開く。外面ハケ調整、内面頸部以下がヘラ削り。灰黄褐色(10YR6/2)～褐灰色(10YR5/1)で、砂粒を多く含む。5は第3号住居跡床面出土。ほぼ完形に復元できる。口縁はくの字に外反し、外面は全体をハケ成形したのち口縁部と底部付近をナデ調整している。内面は頸部以下がヘラ削り。橙色(2.5YR7/8)で、砂粒を多く含む。8は第4号住居跡出土。口縁はやや外反ぎみに開く。外面ハケ調整、内面頸部以下がヘラ削り。橙色(7.5YR6/6)～浅黄橙色(7.5YR8/4)で、砂粒を多く含む。

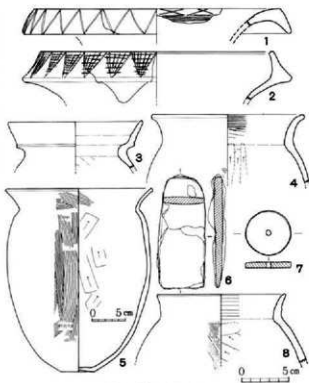
その他：6の鉄塊は保存状況が悪く充分な錆の除去ができていないが、板状鉄斧であろう。7は砂岩質の石材でつくられた紡錘車である。ともに第5号住居跡出土。



▲3号竪穴住居跡出土の甕



▲板状鉄斧



弥生時代遺物実測図

中世の遺構と遺物

遺構

本遺跡は、遺構・遺物ともに中世のものが圧倒的に多い。なかでも注目すべきは、調査区のはほぼ中央でL字形をした大溝（堀）が発見されたことである。堀の北側で石組溝2条・石組井戸1基・土城36基・根石状集石遺構3基・柱穴多数が検出され、その南側で素掘り溝3状・土塼46基・柱穴多数が検出された。ここでは、その中から主な遺構を取り上げて紹介する。

堀

調査区のはほぼ中央を東西方向に延びている。その東端はL字形に折れ、北に向かっていく。その延長を確認するため、北方へ検出を続け、必要な箇所にトレンチを入れた。砂礫が露出し検出が困難を極めたが、遺構配置図に示した通り、堀の東端角から25m北に位置する東西方向4mのトレンチでは、堀の西壁と東の立ち上がり部を確認した。さらにその北30mに位置する東西方向30mのトレンチでは、その東側で堀の西壁とみられる落ち込みを確認した。これら堀の東筋は、上幅約3m・底幅約1.5m・壁高1m強である。

次に、調査区外北側に、南北方向60mのトレンチを入れ、その南側で東西方向に延びる溝を検出した。その溝は、確認した約16mを直行しており人工によるものではあるが、上幅約1.6m・底幅約1m・壁高18cmと小規模であり、堀に接続するものか不明である。もし接続するものとなれば、堀は方形に巡るものと理解される。

調査区中央の堀は、現存上幅約300cm・底幅150～220cm・壁高70～90cm・側壁傾斜35°～50°である。西の調査区境から東端角まで32mを検出し、そのうちの28mを掘り込んだ。

検出した堀の西端付近には2条の石組溝が、北から流入している。1号石組溝は堀の手前で暗渠となり、堀の北壁を切っている。またそこから11m東では、堀が38号・39号土塼を切っている。その土塼埋土が側壁となる箇所では、壁の崩壊を防ぐため、その北壁に20cm前後の大きさの石が貼られ、南壁は他所に比べ緩い傾斜となっている。

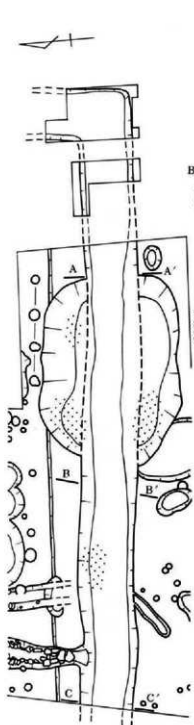


▲調査区中央の堀を西から見る

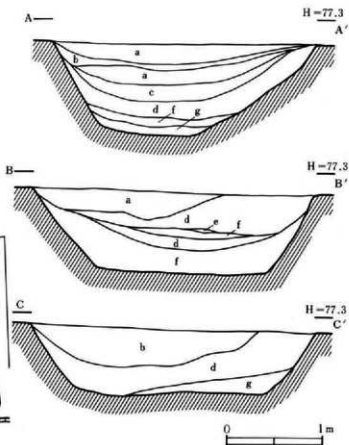
38号土塼の北に180cm間隔で堀と平行に並ぶ柱穴や石組溝の暗渠は、堀に平行した堀内施設の存在を示唆する。土層断面は、自然堆積を示している。底に粘土質土と砂質土の交互堆積が見られず、地山が砂礫であることから、空堀の可能性が強い。

石組溝

調査区中央で、側壁を石で護岸した溝2条を検出した。両溝は、方形



堀実測図



- | | |
|-----------|----------------|
| a 褐色砂質土 | e 砂粒 |
| b 明黄褐色砂質土 | f 暗褐色土 (遺物を含む) |
| c 砂礫 | g 礫を含む灰褐色粘質土 |
| d 褐色土 | 地山は古期沖積の砂礫 |

堀の断面



▲堀の断面 (A-A')

に広がった際の南端同一箇所から、間隔をやや広げながら南へ直進し、堀へ接続している。堀の手前1.5mでは、その後の水田開墾によってさらに深く削平されている。

1号石組溝：1号石組溝は、2号石組溝に比べて大きな側石を用い、造りも丁寧に、残存状態も良い。残存長約16m・溝幅約40cm、底は南ほど深く最大壁高は66cmである。側壁は、方形で板状の自然石を多用している。最大の石は、平面50×55cm厚さ22cmである。

堀へ接続する手前では、溝の幅が狭くなっており、長さ158cmにわたって4枚の蓋石をはった暗渠になっている。蓋石は直接掘り方にのせているが、その上の両岸には流れの方向に石が並べられ、蓋石を押さえている。

南端は、堀の北壁を切って流入させているが、溝底と堀底の比高は23cmである。

2号石組溝：残存長約12m・溝内幅約50cm・壁高20cm前後で、1号石組溝に比べ浅い。堀の手前では、37号土壇を切っている。南端は、後の削平によって溝底が確認できないものの堀へ接続していたであろう。側石は比較的小さく、方形板状をなしていない。石の長軸を流れと垂直方向に積む小口積みにして、安定を保っている。

建物

調査区のはほぼ全域から、柱穴とみられる小ピットを多数検出した。とくに調査区のやや北東側に、集中的に存在する。その多くが本来、掘立柱建物を構成していたとみられるが、その中から明確に建物として復元し得たものは6軒である。それらはいずれも棟方向が、堀の方向とはほぼ同じか直交している。

また、根石と思われる集石遺構3基を確認した。

以下、掘立柱建物4軒と一对の根石状集石遺構の概要を記す。

2号掘立柱建物：復元した建物群の北端に位置し、棟方向を南北にもつ身舎3間×2間の建物で、本遺跡では最小規模である。身舎の桁行5.4m・梁行3.6mで、柱間距離は1.8mである。

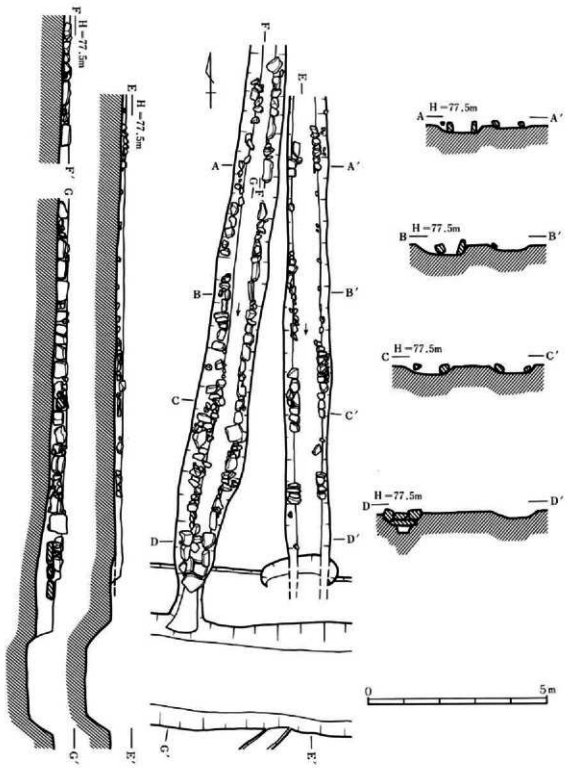


▲堀の手前に造られた1号石組溝の暗渠



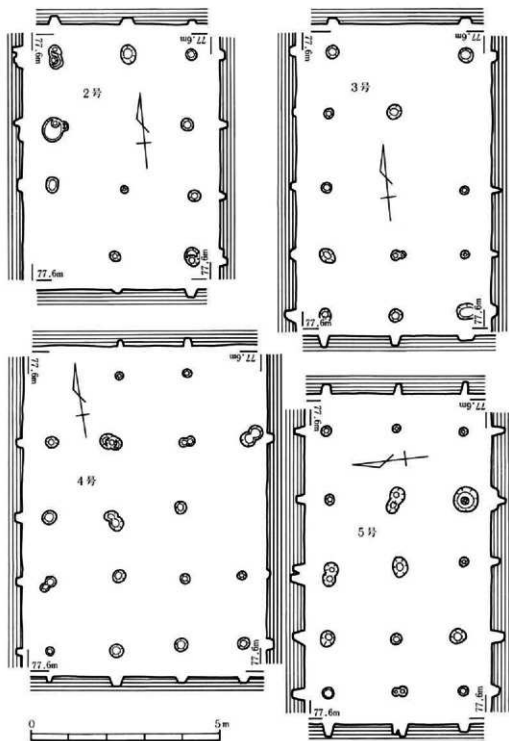
▲石組溝を上流（北）から見る

1号石組溝は板状の石を用いて丁寧に造っている



石組溝實測圖

3号掘立柱建物：2号建物と重複して、その南東側に位置する。棟方向を南北方向にもつ身舎4間×2間の建物で、2間×2間の主屋の南北両側に1間の庇をもつ。身舎の桁行6.8m・梁行5.4mで、主屋の柱間距離は1.8m・庇のそれは1.6mを測る。



掘立柱建物実測図

4号掘立柱建物：3号建物と重複して、その南西に位置する。棟方向を南北方向にもつ身舎4間×3間の建物で、本遺跡では最大規模である。身舎の桁行7.2m・梁行5.2mで、柱間距離は約1.8mである。

5号掘立柱建物：4号建物と重複して、その南に位置し、棟方向を東西方向にもつ。東側調査区外へさらに延びている可能性もあるが、調査区内のみでみると身舎4間×2間の建物で、3間×2間の主屋の西側に1間の庇をもつ。身舎の桁行7.0m・梁行3.6mで、主屋の柱間距離は1.8m・庇のそれは1.6mを測る。

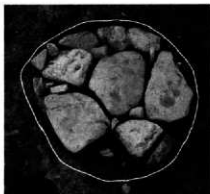
根石状集石遺構：調査区北側の4号堅穴住居内に、1対の根石状の集石遺構がある。根石とは、建物の柱を安定させるために、その底に敷く石である。

1対のうち南側の方が、原形をよく保っている。直径約1mの円内に比較的大きな板状の自然石を3個置き、その隙間を中小の石で埋め、高さ12cmの円柱状に整えている。

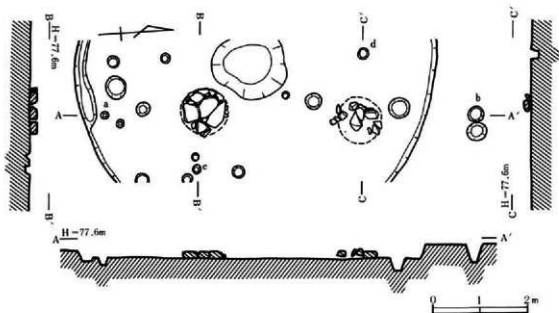
一方、北側のそれは、石が割れ散乱して、円形を崩している。石には焼け跡がついており、火災を受けたことを推測させる。

なお、その両者の中心を結ぶ直線上、それぞれの外側2.4cmのところには柱穴（a・b）があり、またその直線に直交して1.4mのところにも、それぞれ片方ではあるが柱穴（c・d）がある。

厚さ12cmの石を径1mの円内にテーブル状に敷いた造りは、上部構造が立派であろうことを推測させる。



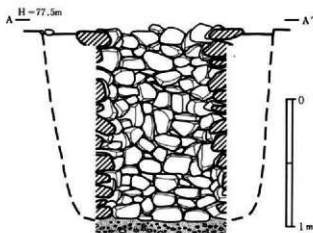
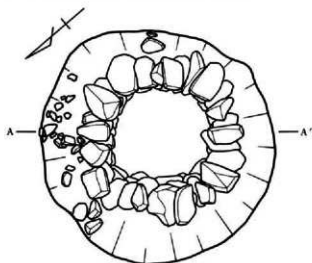
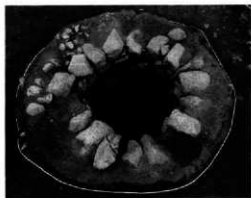
▲根石と思われる集石



根石状集石遺構実測図

1対であることから、門の可能性が高い。

石組井戸



石組井戸実測図

3号竪穴住居に重複して掘り込まれている。石組の内径は約80cm、掘り方の径は180cmである。残存する深さは約150cmと、比較的浅い。

掘り方を湧水砂礫層まで下げておき、偏平で安定した石を底に置いて、大小の自然石を巧みに組み合わせながら垂直に積み上げていく。底に木枠や曲物などを設置した形跡はない。石の積み上げは逆時計回りに行い、小口積みにしている。また、石組と掘り方との間の裏込めには、小石を混ぜている。

削平以前の上位施設である井桁や覆屋などがあつたか否かについては、手掛かりがなかった。

深さ約150cmと浅い井戸ではあるが、現在も湧水が豊富で、井戸の底を流れているのが認められる。

井戸底の湧水砂礫中から、中世土師器片と木片が出土した。木片は小さく、原形を推測し難い。

土壌

中世に比定できる土壌は、82基を検出した。

本遺跡の土壌は、円形・長円形・隅丸方形あるいは不整形のものといろいろあるが、断面形は概して浅く、皿状・すり鉢状をしている。

それらを遺物によって大別す

ると、土師器・陶磁器などの生活用具遺物をもつもの、生活用具遺跡と自然石をもつもの、粘土塊・鉄滓（鉄製品を作ったカス）などの生産活動に伴う遺物をもつもの、自然石のみのもの、遺物などが無いもの、の5つのパターンに分けられる。それぞれに該当する土壌は、つぎの通りである。（数字は土壌番号を示す）

A、生活用具遺物をもつもの—2・5・11・13・14・16・18・19・24・29・33・37・38・39・41・42・43・44・45・46・47・48・49・51・54・56・57・58・60・62・63・64・78・79・84・85

B、生活用具遺物と自然石をもつもの —9・10・12・15・17・20・21・22・23・25・26・27・59・75

C、生産に伴う遺物をもつもの—6・34・35・36・66

D、自然石のみのもの —52・53・61

E、遺物などが無いもの —4・7・8・28・30・31・32・50・55・65・67・68・69・70・71・72・73・74・76・77・80・81・82・83

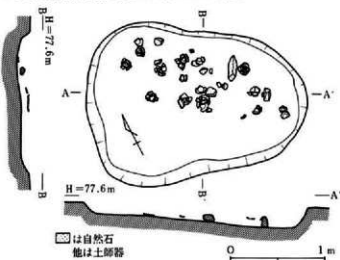
土壌の用途は様々に考えられるが、その形状や遺物から推して本遺跡の土壌は、生活廃品等の捨て場と生産活動に関連した土壌であったと考えられる。前者はA Bのタイプ、後者はCのタイプがそれにあたる。Dタイプは不用物捨て場としての可能性が高いが、何らかの施設の下部構造であった可能性も残る。Eのタイプは不明である。

以下、特徴のある土壌について記述する。

12号土壌：3号竪穴住居の南に隣接する。平面形は不整の長円形で、長軸233cm・単軸約160cmである。断面形は浅い皿状をなし、床は東へ傾斜して、東壁高22cm・西壁高



▲5号土壌内から折り重なって出土した土師器



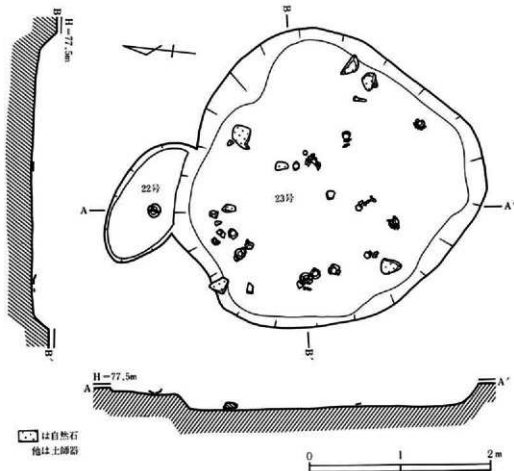
12号土壌実測図

11cmを測る。遺物は、土師器の皿・青磁片・瓦質すり鉢などが、自然石とともに出土した。

23号土壇：4号竪穴住居の南東に隣接し、北縁は22号と重複している。その切り合い関係は、明らかでない。平面形は不整形形で、長軸322cm・単軸306cmである。断面形は浅い皿状をなし壁高18cmである。遺物は、土師器の皿や坏・青磁白磁片・瓦質の足筒やホウロクなどが、自然石とともに出土した。

34号土壇：調査区中央にあり、35号・36号土壇と切り合っているが、その切り合い関係は明らかでない。平面形は不整形形で、長軸推定400cm・単軸約280cmである。断面形は浅いすり鉢状をなし、深さ15cmである。遺物は、土師器や陶磁器片などとともに鉄滓・鉄片・木炭片・焼け石を出土した。これらの遺物は鍛冶との関連を示す。底面に焼土はなく、この土壇がその施設そのものではないしろ、近くには鍛冶工房があったであろう。なお、そこから5m南の堀の底で、多量の焼け石及び焼土塊と輪の羽口（送風器の部品）が出た。

38号・39号土壇：両壇は、堀によって切られている。形状からは1つの土壇に見えるが、遺物によると、38号が39号に先行している。両壇とも長軸約10mである。断面形は逆台形をなし、深さは60cm前後ある。本遺跡では、最大規模である。



22号・23号土壇実測図

遺物

土井遺跡から発見された中世の遺物は膨大な数であり、おそらく細片を含めると数千点に上るものとみられる。大半が未整理であるので、今回は欠損の度合いが比較的少ないものを中心に報告を行いたい。

整理を行った遺物の種類別内訳は、土師質土器片306点、瓦質土器片58点、輸入陶磁器片51点、国内産陶器片31点、瓦片2点、土鍾3点、フイゴ羽口2点、硯片1点、石臼片2点、砥石片5点、スラグ、鉄片20点、焼土塊などである。

土師質土器

食器としては坏や皿がある（1～50）。坏や皿の区別は便宜的なものであり、身の深いものを坏、浅いものを皿としたが、用途は同じものである。土器の作りから2種類に分けることができる。Ⅰ類（1～13、15～21）は橙色（5YR6/6）をした厚手の土器であり坏と小皿がある。Ⅱ類（14・22～50）は淡黄色（2.5YR8/3）をした薄手の土器ですべて皿である。胎土は極めて精製されており、焼成も良好である。皿には大小の区別があり、盛る料理により幾つかの規格に分かれていたらしい。

Ⅰ類中心の一括資料としては、第23号土壌の出土品（7～14）があげられる。坏（7～10）は口径が約13～14cmで器高が4.0～4.5cmを測る。体部は直線的に開き、内外面はロクロ成形痕が残るが部分的に静止ナデを行っているものもある（9・10）。底部は糸切り痕を明瞭に残している。小皿には器高が2.0～2.5cmの小坏とでもしたほうがよいような深身のもの（11・12）と器高が1.0cm前後の浅い皿（13）がある。作りは坏と同じで底部は糸切り痕を明瞭に残している。坏は他に6点を図示したが、第23号土壌の坏とはほぼ同じものに第529号柱穴出土の坏（1）があり、口径がやや大きいものに第17号土壌出土の坏（3・4）が、口径がやや大きく器高もやや高いものに第5号土壌出土の坏（2）と第38号土壌出土の坏（5・6）がある。15～21の小皿は第38号土壌から出土した。

Ⅱ類の皿のうち14はⅠ類の土器と共伴して第23号土壌から出土した。口径12.5cmで器高3.2cmを測るやや深めの皿である。体部は直線的に開くがやや丸みを残している。22～32は第12号土壌出土の一括品である。口径約12～13cmで器高2.0～2.5cmの皿とやや小型の皿（灯明皿に使用）がある。体部は直線的に開き内外面にロクロ成形痕が残るが、内面を静止ナデするものもあり、口縁端部などにも内面を丸く仕上げようとする意図がわずかに感じられる。底部は糸切り痕が残るが、静止ナデを行うものを中心に糸切り痕の上に板目痕を残すものもみられる。33～47は堀の出土品である。口径約22.6cmで器高5.0cmの大皿（41）から口径6.2cmで器高1.0cmの小皿（81）までさまざまな大きさを持つ。このうち33～35・37・43などは明らかに堀の埋土の上層から出土したもので、体部は直線的に外に開き、内外面にはロクロ成形痕が強く残っており、全体に作りが粗雑な印象がある。底部は糸切り、板目を持つものもある。

48（第10号土壌）・49（堀）・50（第8号土壌）は、Ⅱ類土器の小皿の器壁を内に折り曲げ



▲土師質土器杯 (I類)



▲同灯明皿 (I類)



▲土師質土器皿 (II類)



▲同はしおき (II類)



▲輸入された青磁碗 (龍泉窯系)



▲壺 (かめ 龜山焼)



▲火舎 (火鉢)



▲火舎 (火鉢)



▲摺鉢 (すりばち、備前焼)



▲石臼



▲土鍾 (魚網のおもり)

たもので、箸置きとして使われたものと思われる。

このほかには、調理器である足釜（61、第736号柱穴）や脚付鉢（55、第8号土壌）、足鍋、摺鉢なども出土している。

瓦質土器

足鍋、足釜、摺鉢（65、第43号土壌）、鉢（56、68、第9号土壌）、火舎（火鉢、63、第5号土壌、64、第34号土壌）などがある。火舎はいずれも比較的身の低いものであり、口縁部を内側に大きく折り曲げている。63は精巧に細工された脚を持ち、64は内外面ともに丁寧に磨かれ、光沢のある黒色を呈している。

輸入陶磁器

青磁片33点の大半は龍泉窯系の青磁である。51（第369号柱穴）は体部外面に筋連弁を削り出した優品。52（第64号土壌）は退化した連弁を持ち、53（第12号土壌）は体部外面に雷文帯を有する。

白磁は16点、合子形のものとお碗があり、後者には同安窯系の製品も含まれる。

国内産陶磁器

土師質土器や瓦質土器の多くは在産であるが、このほかに他国の産地から移入されたとみられる陶器類がある。備前焼片8点には、摺鉢（66、第23号土壌・67、堀）とお碗がある。そのほか、摺鉢などの須恵器系中世陶器片11点、灰釉碗や古瀬戸の水注・梅瓶などのいわゆる瀬戸・美濃系灰釉陶器片5点、同常滑焼片2点、同亀山焼片5点などがある。

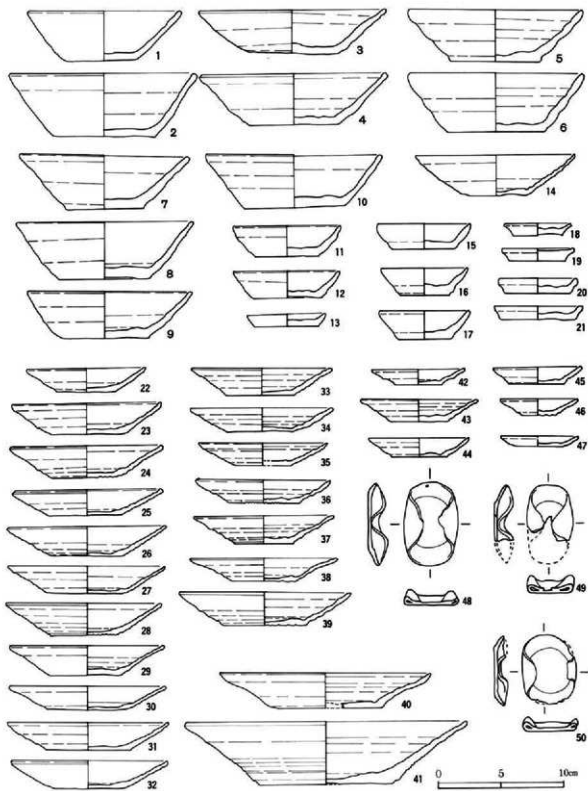
その他

57（第34号土壌）、58（第28号柱穴）、59（第17号土壌）は、いずれも土師質の土鍾。60は堀出土の硯。約1/3残存しており、中央部は使用のため振り減り凹んでいる。62は堀出土の角四石安山岩製の石臼。

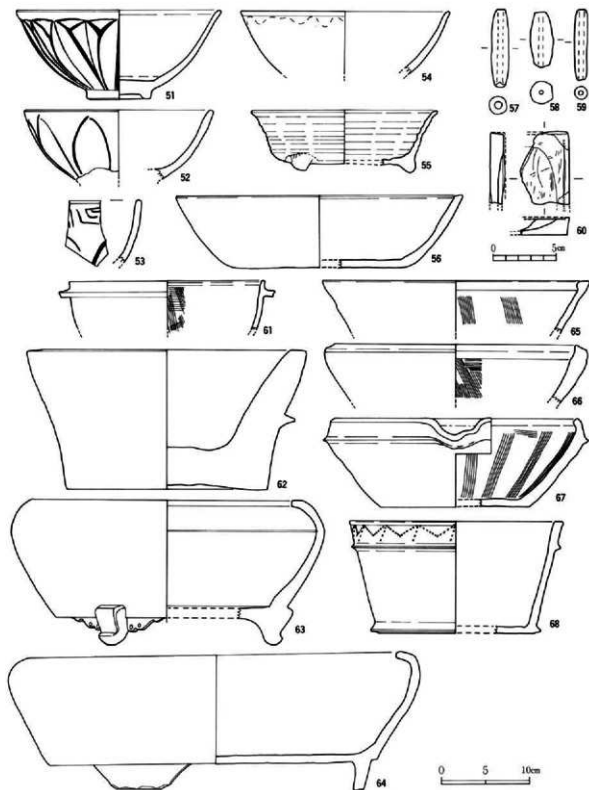
土師質土器・皿のⅠ類とⅡ類土器は、時期的に前後関係にあり、Ⅰ類が古くⅡ類が新しい。Ⅰ類を中心とした一括品である第23号土壌出土品には、口縁部がやや肥厚し端部が斜めに切り落とされた備前焼の摺鉢（66）が伴い、この摺鉢が14世紀後半に位置づけられることから、この一括品は14世紀代の後半期に位置づけられよう。他のⅠ類土器もほぼ同時期のものと思われるが、やや大振りなもの（5・6）などは先行する可能性がある。そのほか、第23号土壌出土品より先行すると思われる遺物に51の龍泉窯系青磁があり、13世紀後半期の特徴を持つ。また、61の土師質の足釜は、14世紀前半期の特徴を持つ。

次に、Ⅱ類土器の一括品である第12号土壌出土品は、共存する龍泉窯系青磁（53）の特徴から、15世紀代に位置づけることができる。また、堀の埋土中から出土したⅡ類土器は、67の備前摺鉢を伴うことから、15世紀末から16世紀前半期に位置づけることができる。

土井遺跡から発見された中世の遺物は14世紀から15世紀を中心とする時期のものということができる。



中世遺物実測図 1



中世遺物実測図2

近世の遺構と遺物

遺構

調査区南西端で素掘り溝が1条、北側トレンチ内で方形石組遺構が1基検出されたのみである。近世には、調査区のほとんどが、農地などに替えられたと推察される。

方形石組遺構

調査区外北側、南北方向60mのトレンチ内で検出した。東側は削平が著しく、最下段の一部しか残っていない。

遺構の内側が、長辺約90cm・短辺約70cmの方形に揃えられている。短辺は、南北方向と一致する。壁高は、残りのよい西壁面で約30cmである。

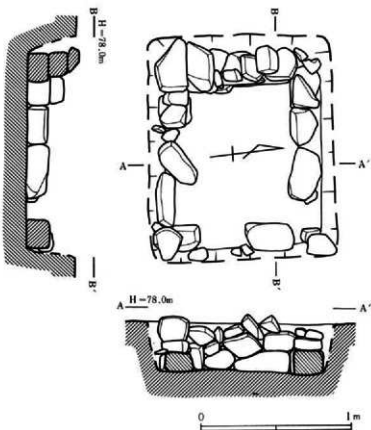
石の組み方は、下段では自然石を横積みにし、上段になるにしたがって小口積みになっている。自然石は、下方の大きいもので長さ35cm・幅18cm・厚さ13cmあり直方体に近い。表込めには礫を多用している。

石組の床面には黄



▲方形石組遺構

調査区西方約50mには同形式の溜池2基が現存する



方形石組遺構実測図

褐色粘質土を貼っており、水漏れを防いだものとみられる。

遺物

調査区の北側のトレンチ内で発見された石組遺構と第4号溝から近世の遺物が発見されている。その内訳は、陶器類、染付け磁器類、摺鉢、素焼きの甕などである。

1は長門深川産の萩焼で、萩焼古窯出土遺物のうちの碗V類（開口碗）aに相当する。薬灰釉を施した体部は直線的に開き、底部との境に稜を有する。底部は露胎で、高台内部は丁寧に削っている。胎土は地土の河原土とみられ、灰白色を呈している。口径12.6cm、底径5.4cm、高台径4.4cm、器高6.5cmを測る。

2は京焼系の陶器と思われる。体部は内湾ぎみに立ち上がり、底部との境は不明瞭で稜は無い。高台部は露胎で、削りは丁寧。釉は灰釉をベースにした透明釉で、内面には白と赤の顔料で花文を絵付けしている。胎土は淡黄色で精製されている。口径13cm、高台径4cm、器高4.7cmを測る。

1と2はともに18世紀後半以降のものと考えられ、特に1は、18世紀後半以降に操業していた長門深川窯の東ノ新窯2号・西ノ窯1号・本窯4号などの物原から大量に発見されている。昭和53年から60年にわたって行われた発掘調査の結果、長門深川窯では、18世紀以降窯の規模が増大し生産力が向上したことが判明している。製品はこのころから、江戸・大阪・和歌山などかなり広域に商品として流通するようになったことも最近の調査で明らかにされている。土井遺跡での発見は、萩焼の流通を考える上で興味深い。



ま と め

明らかにされた弥生のムラ

今回発見された弥生時代の集落跡は、仁保谷での最初の弥生集落の発見であった。これまでに埋葬遺跡である丸山遺跡の調査例しかなかった仁保谷における弥生文化の展開をとらえる上で、今回の調査は貴重な資料をもたらしてくれた。

弥生のムラは浅地川右岸の段丘上に営まれている。段丘下の浅地川の氾濫原は、当時は段丘を伏流してきた地下水が湧き出して広い低湿地を形成していたとみられるが、おそらくここを水田に利用していたのであろう。背後の宮野丘陵にはクリ・クスギ・コナラ・アラカシなどのうっそうとした森林があって、ムラの人々はここで木の実を採集しシカやイノシシを追っていたのだろう。また、浅地川や仁保川では川魚を捕らえていたと思われる。こうした環境が、ここ土井の弥生のムラを成立させた要因である。

段丘の先端部は古期沖積層の砂礫で構成されているが、山寄りには洪積粘土層で構成されている。住居はほとんどこの粘土層に掘りこまれており、ムラは調査区の東に隣接する道路から山寄りにかけて展開していると思われる。その規模は不明であるが、地形的制約から見ると、最大限南北100m東西80m程度であり、実際はこれ以下であった可能性が高い。

検出された竪穴住居の時期は、出土土器の特徴から、いずれも第V期（後期後半）とみられるが、ムラが形成されるのは、第4号住居跡埋土中から出土した壺(1)が示すように、第Ⅲ期（中期後半）の時期である。ムラは少なくとも100年以上にわたって営まれたのである。

発見された土器には、瀬戸内地方に多いタイプ(1・2)と山陰地方に多いタイプ(3)がみられるが、ここ仁保が山陽と山陰をつなぐ重要なルート上にあったことを暗示している。

明らかにされた平子（仁保）氏館跡

平子氏館がどこにあったかについては、これまでに多く論じられてきた。いずれも地名や伝承をもとにしたものであるが、推定地は次の二箇所に限定できる。ひとつは「堀ノ内」という地名が隣接する、字中の土井付近であり、他のひとつは、「地下上甲」で館跡と伝える旧長井屋敷跡や正法寺跡、光現寺跡があり「御館」「用作」などの関連地名が集中する、土井河内付近である。今回の開場整備工事では、このいずれもが一部施工区域に重複しているので、さきに紹介したように綿密な試掘調査を行い、後者の土井河内に調査区をしぼったのである。

さて、今回発見された中世の遺構を、われわれは平子氏館跡の一角と想定したが、その理由について少し触れておこう。調査区が館跡の有力な推定地に隣接していることから、われわれは当初から館跡の発見を想定しながら調査を進めていたが、そうした中で、調査地区のほぼ中央部東西にはしる大溝が発見された。大溝を追跡していくと、溝は調査区の東でほぼ直角に北に曲がっていくことが確認された。土石流などの攪乱でわかりにくい部分が多かったが、その

延長上でも溝を確認できたので、北辺部にやや不明な点があるが、大溝がコ字形にある一定の部分を含むことが推定でき、この大溝が館を囲郭する堀の一部である可能性が高いことがわかったのである。この大溝で囲郭される部分には特に遺構が集中し、建物や井戸、石組溝などが検出されるのも、ここが館の一角であることを裏付けている。ただし、調査区は厳密に言うところと正法寺跡の前面にあたる。そのことから寺域の一角である可能性も考えたが、堀構えをもった寺は時宗道場の一部見られるものの山口県では皆無に等しいこと、出土する遺物のほとんどが生活雑器であり、しかも豊富な輸入陶磁器や国内産陶器があり、また鍛冶屋の存在を思わせる遺物も出土していることなどから、寺域と考えるよりは館の一角と考えたほうがよいと結論づけたのである。

館が営まれたのは、中世の遺物の項で述べたように、ほぼ14～15世紀を中心とする時期であろう。厳密な時期決定や時期区分は、出土遺物の整理を進めてからにしたいが、土師質土器のⅠ類土器とⅡ類土器が時期的に前後関係にあることから、これによって2期に大別すると、主な遺構は次のような時期となる。

Ⅰ期：Ⅰ類土器を出土する遺構

2.6.11.16.17.22.23.26.27.34.36.37.38.41.42.57.71.72.79号土壌

1～6号建物、井戸、溝-1.2、根石状遺構

Ⅱ期：Ⅱ類土器を出土する遺構

5.7.9.12.25.29.35.39.54.56.62.70.73.74号土壌

これによると、館の主要な遺構はすべてⅠ類土器を出土し、Ⅱ類土器を出す遺構は少ない。Ⅰ類土器はいまのところ14世紀代のものと考えられるが、館の造営された時期もこのころと思われる。この時期は6代重嗣の時期に相当し、服部英雄氏が指摘しているように、隣接する「用¹³作」やこれにあてる殿井手がかかり（用水）が整備され、浅地川から仁保川右岸の開発が進められた時期である。また、堀の時期は、堀が溝さらいされることを考えると、出土土器だけでその時期を決定することがきかない。しかし、少なくとも堀が完全に埋められたのは15世紀末～16世紀前期の時期であり、館はこの時期かあるいはそれ以前にその役割を終えたと考えられる。

表紙の館跡想定図は、推定部分が大半であるが、われわれが現段階で描いているイメージ図である。館の規模は、堀の北辺への展開がいまひとつ確定できないため不明であるが、北トレンチで検出された東西方向の溝を堀の延長と考えると、南北幅が約65mとなる。東西方向は山際まで約100mの空間があるので、この中で方形か長方形あるいはもっと複雑な構造の館が営まれていたらしい。館跡の内部の構造について、堀に面しては館を囲郭する何らかの構造物があり、石組溝は園池に伴うもの、発見された遺物はその規模から付属的な家屋、第38号土壌に面した1間間隔の柱穴は櫓、根石状遺構は小規模な四脚門などと推定した。何れにしても、館の主要部は道路から山寄りにかけて埋存していると思われる。

今回は調査の概要報告であるが、今後資料の整理を進め機会をあらためて報告を行いたい。

参考文献

(この報告書をまとめるに当たり以下の文献を参照しました)

- 岩崎仁志 「防長地域の足跡について」『山口考古』第17号 1988
- 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 1982
- 高木九一(編) 『仁保の今昔』 1951 村誌刊行会
- 田中倫子 「中世」『仁保の郷土史』1987
- 田中倫子 「中世の仁保」『瑠璃光寺跡遺跡』1988
- 橋崎彰一(編) 『世界陶磁器全集』 第3巻 1977
- 服部英雄 「中世荘園と館」『日本城郭体系』別巻1 1981

山口県埋蔵文化財調査報告129集

よみがる仁保の歴史1

土井遺跡

—平成元年度県営潤場整備事業に伴う発掘調査概報—

平成2年2月

編集 財団法人 山口県教育財団

(山口市大手町2130)

山口県教育委員会文化課

(山口市滝町1-1)

山口県埋蔵文化財センター

(山口市春日町3-22)

発行 財団法人 山口県教育財団

山口県教育委員会

印刷 隣報社写真印刷株式会社

(下関市清来1328番地)